

# 濟州島における伝統的集住空間構成に関する研究

朴 賛 弼

## A Study on The Space Composition of Traditional Houses and Village of Seong Yup Cheju Island

PARK Chanpil

This paper is the investigation for Seong Yup village and traditional houses in Cheju Island. The purpose of this study is to find out the some characteristics concerning space composition. Architecture conforms to the natural and social environments, and to historical traditions. The idea behind an architecture is personal, and also objective. In history, a form of architecture appears, grows little by little and continuously changes as the centuries go by.

Recently, however, the destruction of the environment due to indiscriminate resort developments in the islands has become conspicuous. We must stop further such developments. We should instead study the islander's private dwellings, those which are part of the island's traditions. We should look for the characteristics which are unique to the area. We must seek the uniqueness of the local architecture. Cheju Island has the most unique culture in the Korean Peninsula. It is totally different from the culture in the mainland. The peculiar sense of space, and the shape of the houses attract one's attention. The deciding factor for such characteristics is the climate. With strong sea winds and a amount of rainfall, the wind has the greatest impact. Basalt is obtaining a unique effect from strong winds. The roof is made of durable materials packed tightly and fastened to produce a unique form.

### 1 はじめに

建築の形態は自然環境と社会的環境、そして歴史的伝統に従って成り立つ。この形態の理念

は個人的であると同時に客観的であり、過去の歴史の中で、一つの形が発生してから数世紀が経過する間に徐々に成長してきて、変化を続ける。しかし最近、濟州島における無分別なリゾート開発によって環境が破壊されてしまう傾向が目立つ。我々は、これ以上の無分別な開発を抑制し、島の重要な伝統の一つである民家を理解して、建築が持っている地域の特性、つまり郷土性追求をするべきである。

濟州島という島は朝鮮半島内で最も独特な文化を形成していて、その文化は本土とは全く異なっている。島における自然条件の厳しさは血族の結合を緊密にし、共同運命体という枠で、生活し続けてきたのである。

こういうことが濟州島の独特の集住文化を形成してきた。固有の空間性、形態要素などが歴然とするのは民家建築の特性である。その特性を決定づける要因は、人文環境・自然環境の要素といえる。研究の対象は、濟州島の東南に位置している「城邑集落」を中心とする。研究進行過程は島の郷土的伝統民家ができるまでの、島の自然的背景、文化的背景、社会的背景、歴史的背景などの環境要因を考察したうえで、島の伝統建築の独自性を論じる。「城邑集落」においては風水思想に関連する形而上学的な理論と方法に基付き、形而下学的な具象としての建築的空間の構成を分析するという新たな着想と方法で行った。住居に対しては濟州島における伝統民家を現地調査や文献調査による、配置、平面、立面からみた立体的な角度で分析し、伝統民家の特徴を明らかにする。そのうえで、結論として自然人文環境が民家に与えた関連性を明確にすることが本研究の目的である。

著者が濟州島の現地へ行って、民家の調査をしながら島の住民の暮らしを見て感じたことは、城邑集落の住民は誰でも民家に対して充分理解していて、伝統を守ろうという気持ちが強かった。現代化された韓国の濟州島にも限らず日本でも暮らしの中で過去の郷土性建築を記録し残すことは未来に向かっても重要である。

## 2 環境要因

### 2-1 気候

濟州島の気候は近海の暖流に影響を受けて、温かい気候であるが、濟州島の真中にある「ハンラ山」(海拔1,950m)の影響で天気の変化が激しい。風速10m/sec以上の台風日数が年平均114日ぐらいで、8、9月は大きな台風によって農作物、建築物の被害が多い。濟州島の北(濟州市)における冬の季節風は北西風で、夏は南東風、南(西帰浦)の冬の季節風は、北東風であり、夏は南西風である。濟州島における風は、石と共に濟州文化形成の明瞭な拘束力となっている。特に、濟州島の民家を見るとよくわかるように、住居形態の物理的な特徴は、風の影響を多く

受けて造られている。

気候は冬でも暖かいが風が強く、天気の変化が多い海洋性気候の特性を持つ。多雨地域であるが夏季集中型である。

## 2-2 歴史

濟州島には先史時代から原住民が生活していたことは、様々な先史遺跡に明らかに現われている。濟州島の歴史は、「タンラ」、「ソプラ」などいろいろな名前で呼ばれる部族国家で形成されていた。この部族国家は巨大な王国や高度な文化国家には成り立っていなかった。百済が強くなると百済

に貢物を捧げ、新羅が統一すると新羅に従い、高麗が建国するとそこに属国となって独立国家的な命脈を保ったのである。1105年高麗の中央集権に所属され「タンラ軍」になり、1211年「タンラ」は「濟州」と言う名前に改称された。1653年には、オランダ人の「ハメル」以下38名が濟州島に漂着、「ハメル」という人が「ハメル漂流記」を書き、濟州島が初めてヨーロッパに紹介された。

## 2-3 風習

濟州島は、三多島ともいわれている。これは、石多、風多、女多を意味する濟州島のまたの名でもある。濟州島の共同体意識は、本土よりもっと強い。経済的に最小限の自給自足に必要な糧の生産は、畑作を中心に行なわれた。従って未分化のままの農耕など、社会的状況や厳しい環境条件から克服する為には当然地域社会の結束を強めて、共同体意識を高める共同体的運営方式による組織を作るようになった。これは、社会的行動を固く括るといふ文化的特性に表われている。

隣近所同士でお金と力を合わせて、村の単位で議論し、物をつくり管理する中で、仲間同士の人情が深くなり共同体の意識が形成されてきたのである。労働力では、屋根材料である茅草を得る為に共同で畑を管理し、公正に分配された。また、水に乏しい状況の解決策では用水集

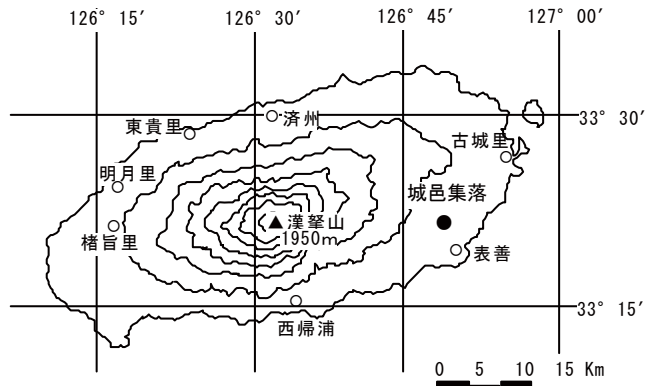


図1 濟州島の研究対象地域

団が形成されてお互いに共同管理を通じて秩序を尊重する意識を育てるようになった。

このように地域共同体内の人間性は積極的であり、社会的な気質を造成するきっかけになり、地域社会内の人間関係は、平等性よりも第一に困難な生活の克服という共同体の運命に関わった。したがって、濟州島の村は経済循環と自給自足体系の機能を円滑に取り運ぶようになり、お互いに取り交わす行為の中で人情と連帯感が強くなって、共同意識が強化された。しかし、共同体意識が社会的規範として作用し、開放的でありながら閉鎖的側面もあるという進取的な2重性を持っている。本土の陸地とくらべると濟州島の特徴は、島であること（insularity）による孤立と限られた領土であるということが言える。孤立と限られた領土からくる閉鎖性と海に向う開放性と共存している濟州島は、理想的現実文化と実在的架空文化が現われている。

## 2-4 信仰

巫俗信仰（shamanism）は国家の発生から来た古い伝統の中の宗教ではなく、生活様式の一部で文化の底辺を形成して来た支配的思想であるから、その中で追求する理想はもっとも原型的であった。濟州島の巫俗は現在まで続いて来て、住民の生活の中に奥深く残っている。地理的制限と悪条件の気候などの環境の中で先代から自然的に発生したこの原始宗教は、生活する為に自分と家族、そして彼らの共同体を依託する必須的で絶対性を持っていることから生活の母体になって、住居と密接な関係で共存する。巫俗信仰の考え方は、現実世界を強調する利己的な世界観を持っていて、人間世界の生と死の二元構造を区別せず、人間は出生から神の守護をもらいながら死んだら神になると考えて来た。

濟州島の巫俗信仰は神の位階にしたがって住居内にそれぞれの領域があり、住居空間の中で場所意識に影響を与えていた。本土から伝わってきた風水思想は集落や住宅を構成する精神的要素として影響を与えた。風水の本質は、過去では人々がいかにして理想的な集住空間を追究するべきかという思想であって、対象として都市、集落、家屋、寺院、王宮、陵墓などの多方面にわたっている。

## 2-5 集落、住居における風水思想の位置づけ

過去の東アジア地域において、集落が形成され住居が建てられるためには風水の理念が関わっていたといわれている。すなわち、自然環境の地形を選定することが風水の根本的思想であって、集落を形成する場所として生理的、心理的に満足が得られる。いわば、集落、住居の周辺の地形が背山臨水、四神相応の形態であり、気が集中する穴や明堂<sup>1)</sup>が存在することである。その穴、明堂の所に集落、住居が配置される。住居の向き（坐向）と門との位置関係は陰陽五

行、東西四宅などから来る凶吉の関係によって決まってくる。風水は居住空間に対して凶を避け、吉を求める心理的に欲求を満足させることを目的として自然環境を最大限に利用した。

郭璞の「葬書」<sup>2)</sup>に“気は風に乗れば散り、水に隔てられれば止まる”と書いてある。すなわち、気を集めて散らさず、気を運行させて留めるということが「藏風得水」<sup>3)</sup>の法である。このような法が成り立つためには「背山臨水」<sup>4)</sup>の地形を要する。

### 3 城邑集落の空間構成

#### 3-1 集落の概要

城邑集落は東、西、南に三の門を持つ石垣の城に囲まれた形を取り、これは風水地理説によると戦乱が起こらない兵火不入之地と言われている。元来、1416年までは東にある古城里につくられていたが、行政上不便であり、さらに台風と東からの侵略が多い為、1423年に今の位置に移った。集落は経度126°4′、緯度33° 23′、標高125mの所に位置している。規模は面積が約1.35km<sup>2</sup>、城郭の長さは約1,200m、城壁の高さは約4.3mである。集落の立地条件は北の郟州山を中心として南斜面に傾斜度5%未満の緩やかな盆地形態である。城郭周辺の川尾川は普段、水がほとんどない乾川であるが、雨が降ると水位の変化が多い。それは地表面が透水性の強い玄武岩で形成されているので、地下で表面の水を吸い取るからである。

#### 3-2 二つの軸

城邑集落の背山臨水は北に瀛州山を背負い、集落の東から南に流れている川尾川を前面とする形態になっている。城邑集落の特徴は普段水が流れていない川を川と見做し<sup>5)</sup>、背山臨水の形態として捉えている。背山臨水と深い関係があるのは「四神相応」である。城邑集落の周辺の地形を風水の四神相応に合わせると図2になる。北の瀛州山は風水学上、主山（鎮山）に当たり、集落を構成



写真1 城邑集落の風景

表1 各家屋の母屋の方位

方位 区域	方位									合計
軒数	36	27	6	7	2	1	2	2	2	85
%	42.3	31.7	7.1	8.2	2.3	1.2	2.4	2.4	2.4	100

する一番高い山である。東のボンジ峰、南山峰が外青龍、内青龍になり、西のモジ峰、ジャンザ峰がそれぞれ外白虎、内白虎になる。朝山は南南東にある達山峰

に当たる。「城邑民俗集落総合整備計画（1994年）」の報告書によると案山は南山峰になっているが、背山臨水の軸<sup>6)</sup>によるもう一つの案山は南にあるゴンチョンイ小山になると思われる。その理由は以下の通りである。①風水では、主山と案山を結ぶ線は気が流れる軸である。したがって、その軸線上に明堂である集落が位置付けられる<sup>7)</sup>。この原則から城邑集落は瀛州山とゴンチョンイ小山の軸線上に置いてある。②集落における各住居の母屋の向きは案山、又は朝山を眺める方位が多い。城郭内の85軒の母屋の方位を調べた結果、ゴンチョンイ小山（南）の向きが36軒で42.3%、達山（南南東）の向きが27軒で31.7%である（表1）。③ゴンチョンイ小山は集落の標高より低い地形であるが、山という名を付けて一つの風水要素<sup>8)</sup>をつくっている。それによって主山と案山を結ぶ軸及び集落と朝山を結ぶ軸が集落の空間を構成する二つの軸になる。

### 3-3 幾何学的空間構成と Settlement line

この二つの軸によって集落には二つの中心点が出る（図3）ことによって城邑集落は幾何学的な配置空間構成になっている。

1) 中心点OとO'の位置の確定：図3から中心点Oは、主山と案山を結ぶ線（背山臨水の軸）と東門～西門を結ぶ線の交点である。中心点O'は倚斗亭と南門（朝山）を結ぶ線と東門～西門を結ぶ線の交点からなる。東、西、南門は客の出入りの門であり、中心点O'は城郭内の中心である客舎の門になる。つまり、中心点O'は門が集中する点として行政的な機能を持つ。

2) 中心点O、O'の幾何学的な意味：点Oから西門、南門、北の倚斗亭までは等距離になる（121m）。しかし、中心点Oから東門までの距離は171mであり、南門、西門までの距離の1.42倍になっていて $\sqrt{2}$ の黄金比に近い。また、中心点Oから北東の城郭の端までは196mあり、1 : 1.619倍になっていてフィボナッチの黄金比1.618に近い。 $\sqrt{2}$ の意味は、風水の天・地・人の思想からなると考えられる。図3に記入したように中心Oを一角とする正方形が作られ、 $\sqrt{2}$ はその対角線線となり“天”に相当する。過去では対角線の寸法がよく使われた<sup>9)</sup>ことからこの $\sqrt{2}$ もその一つであると考えられる。また、1 : 1.618は5 : 8の近似値であるが、風水の5は五皇極といい、全ての道理の根本を意味し、8は太極から派生した八卦を意味する<sup>10)</sup>。この構

成比はいままで調査した集落の中で台湾の恒春県城と韓国の樂安邑城の構成比と同じである<sup>11)</sup>。この比は過去の城郭における集落の空間構成に適用した一つの要素として考えられる。この構成比による集落の形態は南北が短く、東西が長いことになる。それは、集落がほぼ南向きであるからこの形態は日照、日射に有利である。二つの中心軸により、集落における住居の settlement line<sup>12)</sup>も二つになる。

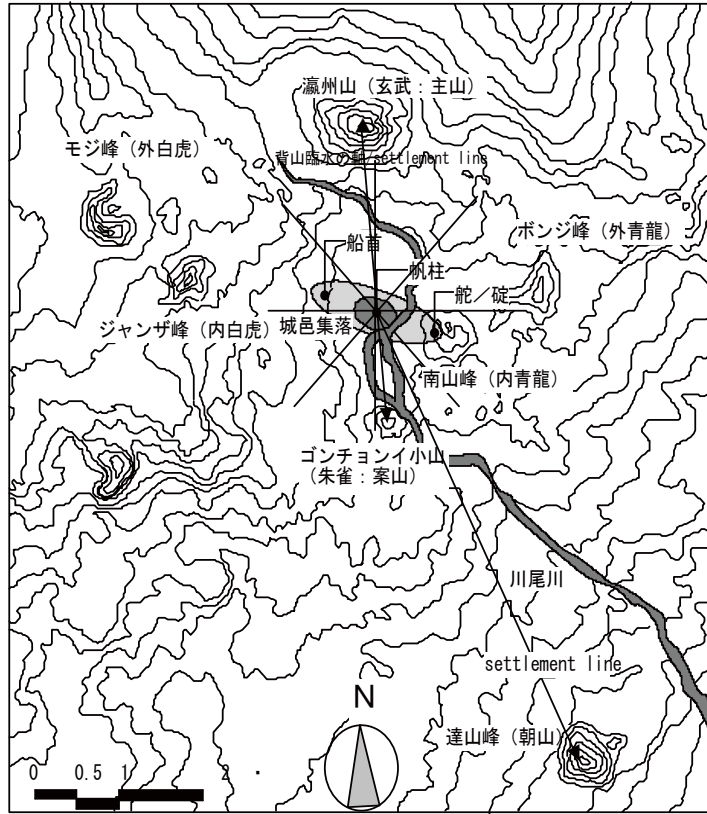


図2 城邑集落の地形における二つの軸と舟形局

すなわち、二つの settlement line は背山臨水の案山と朝山に向けた方向である (表1、図2参照)。このように風水思想の背山臨水の軸、四神相応は城邑集落の空間構成に重要な要素であると考えられる。

### 3-4 形局と小宇宙空間

風水では気が集まる場所、すなわち穴および明堂を中心に、周辺の地形を動物、植物、物、人、文字、天体になぞらえることを形局という。このような形局は地形の形象とその中にある気を具象的に結びつけることから出発したという<sup>13)</sup>。すなわち、根本的な考え方は、見えない気は捕まえることが出来ない抽象的なことであり、その気を具体的な形象になぞらえることによって、気があるところを具象的に表現することだと思われる。したがって、形局論は風水を理解する一つの方法である。城邑は船形局、將軍大座形の二つの形局を持っている。將軍大座

形は広い範囲から見て集落を中心に周辺の地形が將軍の座る場所の形態になぞらえられる。一方、見方を変えて集落の存在する位置は南の地形がやや狭小であり、完璧ではないが、盆地の形になっている。すなわち、当時、盆地は軍事的防衛上有利とされている。狭い範囲での形局から見ると盆地は船形局になる（図2）。南山峰が舵及び碇を表わし、集落の北西の高地帯が船首になり、船は北西を向いている<sup>14</sup>。したがって、集落は船の中心部になり、集落中心の巨木が帆柱を意味している。なぜ、船形局が南の海の方ではなく北西の山の向きになったか、その根拠は不明であるが、集落周辺の地形の形態によるものと考えられる。つまり、図2から見ると北西と南東の山までの距離が長いことと、集落と一番近い南山峰が舟尾になるからである。集落のそばには川があり、夏の梅雨の時は洪水が起こりやすいからため船形局にふさわしいと思われる。このように形局はその時代の社会的側面や厳しい自然的環境に耐えるための象徴であり、心理的に安心感を与える要素であったと思われる。城邑の空間構成は人間が両手を開い

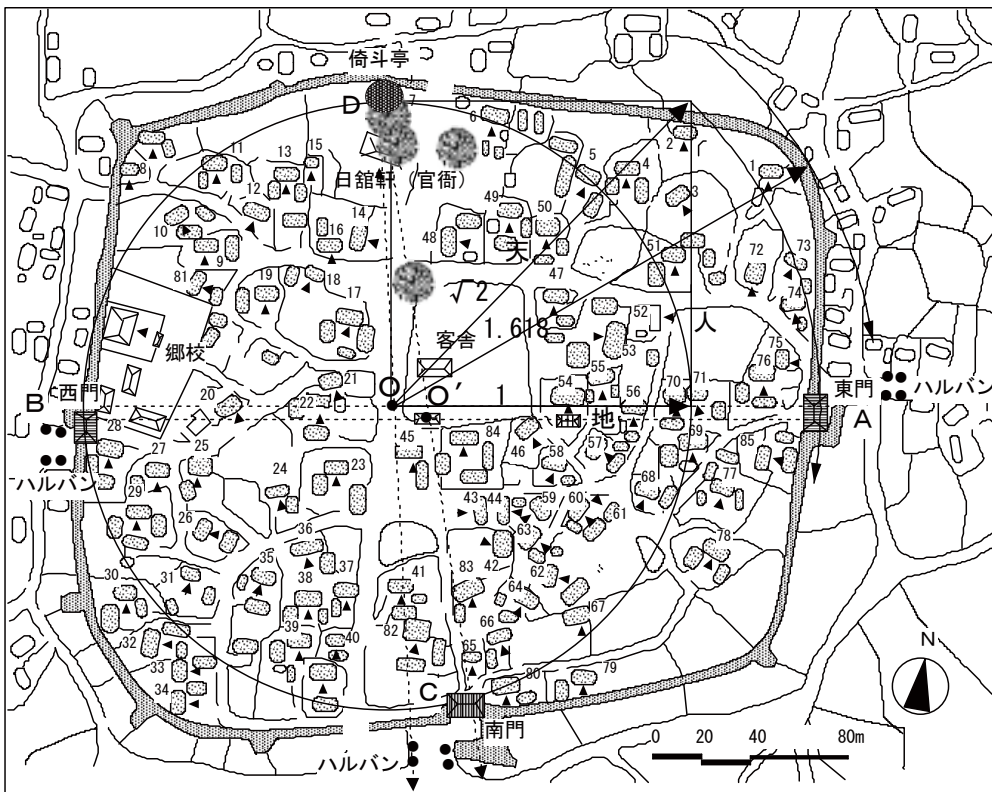


図3 城邑集落の幾何学的な配置空間構成



ている形象になぞらえられていると言う<sup>15)</sup>。  
つまり、三つの門をつなぐ「T」字形の道路  
を中心に北の官衙（日館軒）が頭になり、中  
央の客舎が心臓、西にある郷校が肺になる。  
また、東門と西門をつなぐ道が両腕になり、  
南門につなぐ道が脚になる。このような集  
落の空間構成を一個の人間になぞらえるこ  
とは風水の小宇宙的な考え方である（図  
4）。南北方向の空間構成は北側の高地帯に  
官衙などを配置した行政的空間（ここでは  
公空間と呼ぶ）、中央には教育機関や客舎が  
公共空間になり、低地帯の南には住居空間、  
すなわち私空間の民家が広い範囲で位置し

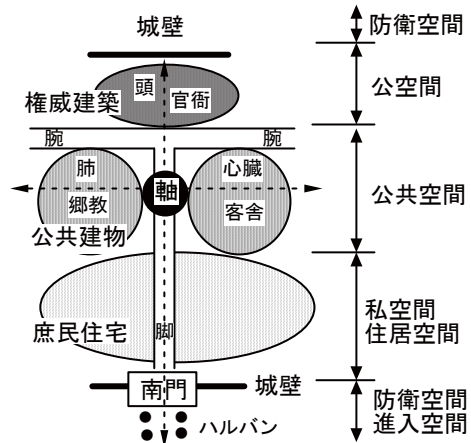


図4 城邑集落の南北空間構成

ている。このような空間構成の特徴は主山からの緩やかな勾配を利用した地形に社会的にヒエラルキーの空間に結び付けていると思われる。風水の裨補<sup>16)</sup>としては城郭の三つの門の前にハルバンがある。この造形物は玄武岩で造られたおじいさんの形をしているが、その役割は境界、呪術宗教、守護神の機能を持つ。このハルバンの位置は本土の魔除けであるヘテ<sup>17)</sup>と違い、悪い方向を眺めることなく、各門の前で一對のハルバンが向き合って置かれている。

#### 4 住居空間構成の概念

濟州島の平面的空間構成の概念は風水思想の陰陽五行の調和である。図5のようにサンバン（板の間）を含めて右側（東）が男性を象徴する陽の空間になり、ジョンジ（台所）を含む左側（西）が女性を象徴する陰の空間になる。また、アンディ（後庭）が陰になり、母屋とマダン（前庭）が陽になる。住居内の穴、明堂の関係はサンバンが穴の位置になり、マダンが明堂の位置になる。このような穴、明堂の空間構成は先祖を祀ることによって先祖の気はマダンの陽の気に繋がり、家族はその気を受けるという意味を持つ（写真2）。濟州島の伝統的な間取りは三つの神々の領域と関係がある。サンバンにはソングジュと言う水平、垂直の神が存在し、家全体を見守る家神となる。すなわち、住居の中心であり、聖の中心でもある。板の間のない家の場合にはアンバン（主人の部屋）で祭っている。このように濟州島ではサンバンがオンドルより重要視されていることがわかる。これは濟州島では本土より冬は暖かく、夏は多湿と猛暑で板の間が発達していたからと思われる。しかし、板の間は本土では扉がなく開放的であるが、濟州島では

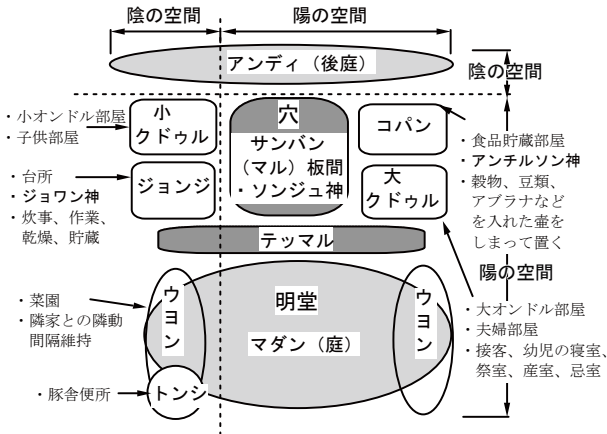


図5 住居空間構成の機能と神領域



写真2 高氏宅航空写真 (凧使用)、図3の54番家屋

風が強い為、扉をつくることによって閉鎖的になっているのが特徴である。ジョンジ (= チョンジ : 台所) には火の神であるジョワン神を祭る。城邑集落では75%の家が、台所は陰の空間に配置していることからみて陰の空間を守っていることがわかる。コパン (穀物を貯蔵する部屋) にはアンチルソンと言う穀物の神がいる。平面類型からみるとジョンジとコパンはサンパンを中心に反対側にあることが分かる。濟州島では農業が厳しい地域であるため、出来るだけ穀物を、火を使う所から離して保存していたことが分かる。穴と明堂を結ぶテッマルは外部、内部空間の中間性を持つ縁側である。機能的には室内に雨、風、日射が直接に当たるのを防いでいる。テッマルは韓国南部地方では発達しているにもかかわらず、城

邑集落では、テッマルがある住居は48.7%であり、半分にも満たないことが特徴である。しかし、テッマルがないかわりに軒からサンパンまでムトゥンという約1m位の軒の深い空間がある。なぜテッマルが退化し、ムトゥンが発達したかはムトゥンが雨、風、日射に対応していることと、濟州島では材木が貴重であり、テッマルが省略されたからと思われる。住居の進入空間構成ではオルレという曲がり道がある。これは、風水からみて直進してくる悪い気を回避することである。現実的に濟州島は風が強い地域であるため、道を曲げることによって風を弱く

することになる。また、各住居のプライバシーの確保の機能を持っている。このため濟州島の家屋の門は扉がある門は少なく、チョンナンという三本の木を横に掛けることで、家の入口になっている。さらに、三本の木は家族の不在を告げるサイン性の機能も果たしている。

## 5 伝統民家の外部空間構成

### 5-1 領域、境界、門

#### 1. 塀、石垣

濟州島は火山島で、至る所に火山岩の塊が多く石は豊富である。石垣の機能は敷地内の角石の処理、防風、視線の遮断、牛馬の侵入防止、境界表示などがある。石垣の高さは一定していないが、だいたい地面から軒端までの高さである。石の積み方は、複列にして高く積む場合もある。石垣の高さ、積み方などは科学的というより長い間の経験から現在のようになったもので、これ以上、変化があれば、風で倒壊するおそれがある。

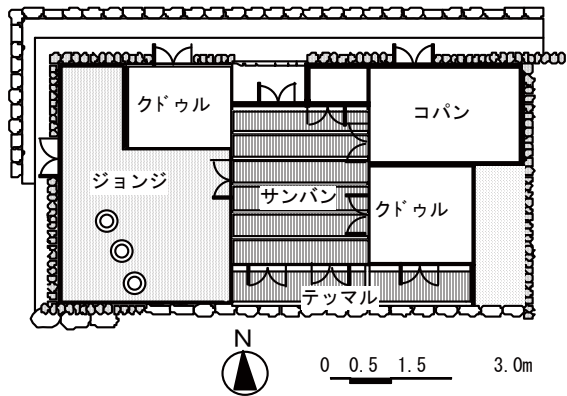


図6 趙氏宅平面図 (図3の84番家屋)

#### 2. 門：大門、後門

大門、(テムン)というのは、床房の前面の出入口にある。門(ムン)は、主なアプローチの入口で、後門(ティムン)は裏にある出入口で、両方板扉をつけた両開きの戸である。大門のわきに窓戸がついている場合があるが、これを「号令(ホリョン)窓(チャン)」とよぶ。この機能は通風の他、人を呼んだり、出入りする人を確認する際に使う窓である。



写真3 境界となる玄武岩の石垣

### 3. チョンナン



写真4 入口のチョンナン

これは機能的には境界としての門の役割をする。出入口に「チョンチュモク」(「チョンナン」を掛ける為に石で作られたもの)を両方に立て三つの木「チョンナン」を横に掛けることで、家の中の人の不在を告げる済州島独特な役割をする。「チョンナン」は済州島の泥棒・乞食・大門がない三無の美風良俗をはっきり見せる文化遺産である(かならずしも大門がないことはない)。「チョンチュモク」では、両方に三つの穴があって「チョンナン」という木の棒を掛け、牛と馬の出入防止と主人の外出などを表示する機能を持っている開放的な門である。「チョンチュモク」は多孔質玄武岩で作られているが、地域によって木も使用して来た。石で作られたものを「チョンチュソク」、木で作られたものを「チョンチュモク」といわれている。

### 4. ハルバン



写真5 ハルバン

ハルバンは細い穴がある玄武岩で作られた造形物であり、そのおおらかな彫り方は素朴で、独特の風合がある。機能面では境界の機能、守護神の機能、呪術宗教的機能などを持っている。例えば、村の入口に立てられ、これからは村に入るという村の境界の知らせ、又は、村の平和を守る守護神にもなる。ハルバンの姿は帽子をかぶり耳が大きいことから南太平洋のイースター島にあるモアイと似ている。その機能も似ていることから遠い国から同じ発想を持っていたことは不思議である。

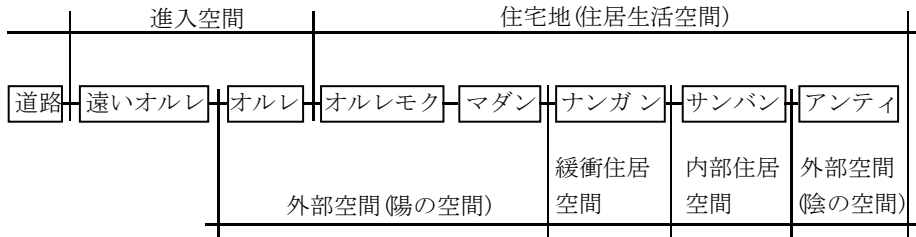


図7 村から居住までの水平空間構成

## 5-2 民家の外部空間

### 1. 配置

濟州島伝統住居が本土との相違点はマダン（庭）を中心とした求心的配置と徹底な別棟配置形式である。これは、巫俗的思考と風水地理の影響、気候的要求、家族的制度の特異性などから起因した確かな地域的の独自性ともいえる。伝統住居の方向は主屋を基準にして、ハンラ山を中心に南に位置した民家はほとんど南向きに配置されていて、北に位置した民家は、北向きに配置されているように背山臨水の原則にしたがっている。外部空間の特異性は「オルレ」、「オルレモク」、「マダン」、「アンティ」というリズムで構成されている。別棟配置によって客棟の間の外部空間は「ウヨン」、「ヌルクプ」などによって自然的にその機能を持っている。建物が配置されたうえで外部に露出し、開放された陽的空間が出来て、外に閉



写真6 オルレ



写真7 マダン

鎖され、個人的な陰的空間や内部空間と一緒に使われる空間になる。この陰的空間は「アンティ」といい、主に常緑樹を植え、外部の視線から遮断し、防風と日陰を作る効果を得る。

## 2. オルレ (進入路)

住宅内に入出入する進入路で幅は2.1～3m 長さは9～15m 程度である。オルレの端は曲がっていてプライバシーの確保、掲示的空間構成になり、空間の秩序の生成の意味が発見出来る。オルレは内と外に区分されて、内の空間は「オルレモク」といわれ、樹木が植えている。

## 3. マダン (庭)

本土のマダンはいろいろ分離されていて、マダンとその建物とは関連性がある独自性を持っているが、済州島のマダンは民家全体が一つのマダンを中心に近接配置されていて多目的機能をもっているのが特徴である。このマダンは建築物と共存しながら相互有機的関係があり、その機能は通路としての役割、屋外生産及び作業、日照、通風、採光、情緒の造成、婚礼・葬式の儀式が行なわれる空間である。すなわち、住宅の「陽の空間」といえよう。太陽の熱が照る時、マダン (庭) はその露出によって発生する地熱により空気の温度が上昇し、熱い気流が発生する。しかし、「アンティ」の陰の空間は日陰になって周りより低い温度を保ちながら気流の循環現象が起こる。これは「マル」(サンバン)の後門の少い通路の気流は速くなって、風がない蒸し暑い夏でも「マル」に座っていれば風がふいてきて涼しいと感じられる。

## 4. アンティ (=アンディ：後庭)

外部には通らないようになっている空間で、他人には公開されない閉鎖的である。ここを出入りしようとしたら必ず「サンバン」の後門、あるいは「ジョンジ」の後門を利用しなければならない。

「アンティ」は日の当たりが悪いため、涼しい風がある空間で、外部との視線が遮断され、家族らのプライバシー空間である。すなわち、住宅の陰の空間といえよう。そこにはいろいろな樹木が植えられ、その種類は、柿の木、椿、柚、竹、梅桃、茗荷などがある。しかし、最近では非公開であった空間である「アンティ」は、半開放的性格を持っている傾向がある。



写真8 アンティ

### 5. ウヨン (菜園)

民家の両側面あるいは、前後に低い段に区画され、野菜以外にも穀類を栽培する空間である。「ウヨン畑」は規模が大きいし、耕作地として取り扱われている。このウヨンは民家の周囲に余裕がある空間などに分散され、一つの場所に集中させるより、民家の内部空間と外部空間のゆとりを成り立たせる効果大きい。



写真9 ウヨン

ウヨンは自家耕作用であり、共同体的な意味はない。家屋の周囲に菜園を置くことによって、隣家との間に比較的広い間隔を保つことが出来るので、火災の防止になる役割をする空間である。

### 6. ヌルクブ (積載場)

藁などを積んでおく所で、これらを積んだ造型物を「ヌル」とよび、燃料として使用される。これらを置く場所はマダンの地面から40~50cm高く石で段を作って平らにする。「ヌル」は民家の屋根と一緒に景観要素として重要な役割をする。

### 7. トンシ (便所)

便所を「トンシ」とよび、これは、台所と離れた「ウヨン」の空間に配置される。豚舎の一部に付随して設けられるのが一般的な形態である。トンシの足をのせる石盤の高さは58cmぐらいで、この下で豚が人糞を処理する。用便中の人が見えないように石壁を築き、その上に簡単な屋根を掛けて雨を防いでいる。



写真10 トンシ

「トンシ」は現在、便所として使われない、ただ豚の飼育として使われている。人糞を豚の飼料の一部に使

用したのは済州島以外に、琉球全域、山東省東部および中部、フィリピンなどである。沖縄では豚便所を「プル」というが、用便する穴を「トウシ」という。呼び方が沖縄と済州島と似ていることからまたは地理の位置からみて、現在のような「トンシ」は沖縄から伝来したと考えられる。

## 6 伝統民家の内部空間

### 6-1 平面の構成要素

平面は一般的に「一字型」で、「曲家」がないのが特徴である。内部空間は「サンバン」(マル)を正面にして、側面に2つの部屋を持っている。そのほかに各部屋は正確な各単位として、構成されている。住宅内部の空間構成には大きく分けて二間型、三間型、四間型の三つのタイプがある。それぞれジョンジ(台所)、サンバン(居間)、クドウル(部屋)の各要素を空間構成の基本として、クドウルの数によって各タイプの特徴を持っている。

棟数は住居の規模を表わし、その数は一〜四棟まで見られる。このため家族の増加や息子の結婚による分家などには、同一敷地内に新たな棟の増築に対応することが普通である。棟内部の居室の長さや広さなどの寸法は決められたものではない。済州島民家の一間という単位は、定められた長さを示す寸法概念としてより、むしろ、柱と柱の間隔、あるいはおおざっぱに空間の幅を意味するものであり、実際には用いる木材の長さによって決まってくる。視点を変えれば非常に現実的な概念であるともいえる。

済州島民家における建物配置の基本型はコ字型、ロ字型ができており、一字型は二字型の未発達型、もしくは衰退型と考えられる。L字型も二字型から変化した型である。すなわち、二字型の建物配置にしようとする前庭の面積が小さくなってしまいう場合には、L字型にする。


建物配置	棟配置のパターン
一字型	
二字型	
L字型	
コ字型	
ロ字型	

図8 済州島伝統民家の棟配置

L字型で脇屋が主屋に比べて貧弱で、二字型で副屋が貧弱な場合には、一字型に見える。コ字型も二字型に脇屋を1棟増設したものであるから、この場合、脇屋はきわめて貧弱な建物である。おもに虚間(ホッカシ=納屋・物置の一種)は木柱が1本もない簡単な石壁の建物である。ロ字型も二字型の両方の脇屋を配置した型であるが、両脇屋の建物もごく貧弱で、二字型にも見える。一字型は貧しい農家または非農家の場合に多くみられる。



別棟式の建物は大規模な建物より小規模な建物、曲家より直家であった。その理由は建築しやすいことや火災を意識して、接続した建物よりは別棟に分離した配置方式をとったものと考えられる。

## 6-2 間取りの機能および用語

### 1. サンバン (床房、居間)= マル

民家の中央部へ位置して、家族の集会、休憩、夏季の就寝、接客、食事、祖先の祭祀などさまざまな機能をもっている。サンバンの意味は(「サム」=生活、「バン」=房)を表わし、すなわち、生活する「居間」が本来の呼称であった。特に、サンバンは主人の権威を表出する場所にもなり、家の神として家内の平安と富を担当する家の代表神を挙げるもっとも重要な所である。サンバンの前後面は外部空間と直接、接しているので夏には通風がよく涼しい。

### 2. クドゥル (オンドル房、部屋)

濟州島ではオンドル房を「クドゥル」という。オンドルが濟州島へ伝来したのは16世紀以前だといわれている。濟州島のオンドルは、本土に比べて退化したよりは、未発達の状態である。オンドル房が1つの場合は、大小の区別なく「クドゥル」とよび、2つ以上あるときは「コバン」(庫房)に接する部屋を「ククドゥル (大オンドル房)、他の部屋を「チャグングドゥル」(小オンドル房)と呼ぶ。「ククドゥル」は夫婦の使用、来客の寝室、幼児の寝室、祭室、産室、忌室などにも使用される。部屋の広さは普通8尺×9尺のものが最も多い。濟州島の婦人たちは、おもに畑仕事と海女で屋外活動の時間が長いために、「ククドゥル」はあまり発達してなかったと思われる。「チャグングドゥル」は子供たちの部屋である。床から天井までの高さは2m前後で比較的低い。

### 3. ジョンジ (=チョンジ: 厨房)

主屋において厨房が占める面積は、2間型では2分の1、3間型では3分の1、4間型では4分の1になっているのが一般的である。しかし、厨房の機能が以前よりも小さくなるにつれて、3間型では6分の1に縮小する例もあり、主屋から厨房が分



写真11 ジョンジ



写真12 ムルパン

離する例も生じるようになっている。「ジョンジ」の機能は炊事、作業、乾燥、貯蔵など家事労働をするための空間であり、女性の主な空間である。「ジョンジ」は「サンバン」と「チェッバン」(食事の準備など家事労働空間)と連結(ジョンジ+サンバン、ジョンジ+チェッバン+サンバン)され、機能分化がよく出来ている。

厨房の壁は石で築き、内部に土を塗って、火事を防ぐ役割をする。もともと厨房は主屋にあったが、厨房の機能が炊事一本にしぼられるようになると、広い厨房の空間に小オンドル房ができ、さらにオンドル房が増設されて、小オンドル房は2部屋となり、おのずから厨房は副屋や脇屋に移されるようになった。もし、もともと主屋と厨房が別棟になっていたのだとすると、日本でいう二棟造りになり、東南アジア、ポリネシアなどの太平洋地域に多い南方的形態とも考えられる。

厨房入口の横に高さ60~70cm程度の平石が積んであるが、「ムルパン(水板)」といいここは水運びの壺を置く台である。

#### 4. チェッバン(板の間)

チェッバンは4間型の間取りに置いて、床房と厨房の間に置かれる板間であり、食事、食事の準備、炊事の準備、など家事労働空間と安息の空間の間にある緩衝空間である。ジョンジ-チェッバン-サンバンが連続することによって、寝食分離が可能になる現代生活の基本の間取りである。空間分別化がよく出来ているのが済州島民家の特徴の一つである。

#### 5. コバン(庫房)

コバンは主に穀物、豆類、アブラナなどを入れた壺をしまっておく部屋である。床は地面より高い土床で、オンドルの設備はない。壁は石壁の内部に土を塗った程度で、採光用、換気用の窓が1~2カ所ある。広さはだいたい6尺×10尺である。クンクドゥル(大オンドル房)とコバンの基本的な計画はコバンがジョンジと離れてサンバンを間にしてクンクドゥルと接している。これは平面計画上、分割方式によって部屋割りを合理的にしたことである。また、小農の生活環境における食料の重要性を裏付ける空間である。穀物貯蔵用の納戸や物置を別棟にせ

ず、主屋の中で設けるのは、間取りが未分化の状態にある初期民家の一部の構造を示す物である。

#### 6. テッマル (縁側)= ナンガン

近所の人が家の主人と短い話をするとき、靴を脱がないで、そのまま腰掛けて話す所であり、子供たちが絵を書いたりする遊び所でもある。テッマルはサンバンとマダンとの間の緩衝空間としてサンバンの機能の質を高めており、雨、風、日光が直接当たるのを防ぎ、一時的な納戸や物置の空間に有効に使われ、外部空間と内部空間の中間性格を持つ。ナンガンとも言われる。

#### 7. 壁蔵 (押入れ)

大オンドル房と小オンドル房には、焚き口に近い壁の上半部に壁蔵が付く。これは、壁にはめ込み式の物入れで、寝具や衣装たんすを入れておく。壁蔵には扉がついているものもあるが、概して少ない。

#### 8. ムットウン

オンドル房と床房に直接雨が吹き込まないように開けておいた空間である。また、軒がオンドル房と床房の前面に長くおりてきているので、日よけの役目も果たしている。



写真13 ムットウン

### 6-3 間取りの形式

濟州島の伝統住居の間取りは、陸地の住居とはまったく違う型である。構成方法によって、2間型、3間型、4間型と分離される。

#### 1. 2間型 (2間マクサリ)

通常2間屋と呼び、間取りの特徴はサンバンがなく、厨房、オンドル房、庫房だけからなり、時には庫房を欠いて、厨房とオンドル房の2つだけの場合もある。たいてい、老夫婦が淋しく

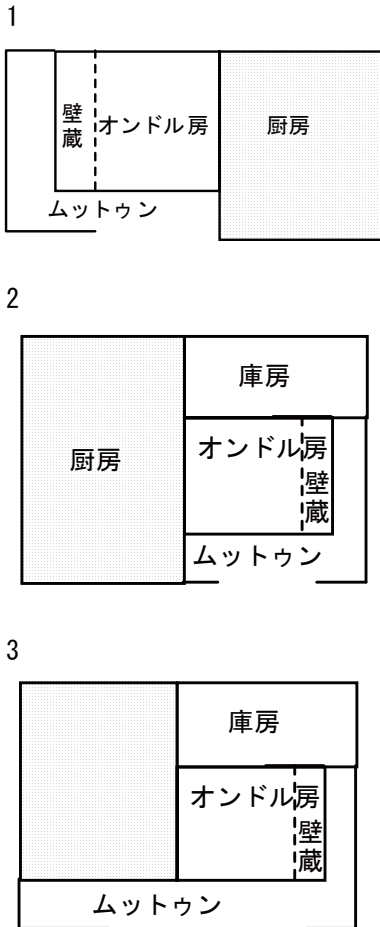


図9 2間型間取り

暮らしている家である。間取りはごく単調で、ジョンジが広がっているのはその機能が炊事場、作業場、物置、食堂などを兼ねているためである。間取り発達の初期段階の姿を示してある。厨房の壁には柱を立てず、石壁の上に垂木をのせて厨房の空間を作っている。板を張ったサンバンやテッマルがなく、地面から約30cm程度の高さのオンドル房と床を土間にしたジョンジなど、正座生活をうかがわせる民家である。図9の例2の場合には、間取りはジョンジ、オンドル房、庫房に分れており、例1よりも進んだ形態とみられる。庫房は穀物を入れた壺をしまう部屋として用いられる。床は土間であるが、湿気が高くなるのを防ぐ目的で、床面をオンドル房と同じ程度に高くしている。庫房の壁には採光、換気、除湿用に小窓が作られている。例3には将来3間型に増築することを前提としている。その際には現在ジョンジに使っている空間は床房になり、その横にあらたにジョンジを接続させるということである。従って、現在ジョンジに使っているところにも角柱を立てており、増築時には石積みの外壁だけを取り払えばよい。ジョンジ内に鶏小屋を設けている点が変わっている。

## 2. 3間型

現在、済州島民家の標準型であり、基本型ともいえるほどに最も多く分布している間取りである。ジョンジは左側に置かれることが多く、ジョンジの空間の一部を「小クドゥル」に変形させたものもあり、サンバンは例外なく3間の中央部に位置する。3間型の型は一般的に普及しており、形式は多様である。だいたい、クドゥル、サンバン、ジョンジの3間で構成されて、次のように分けることが出来る。

### ① 「小クドゥル」がない3間型

② 「小クドゥル」がある3間型

ジョンジの平面形態によって

- a. 1間型
- b. 中サンバン型 (中マル型)
- c. ジョンジ内型

① 「小クドゥル」がない3間型: 「小クドゥル」がない3間型の民家はジョンジとクドゥルの間にサンバンが発生し、空間分化をしている。テッマルは大部分床になってサンバンとクドゥルの前面に細長く敷かれている。このテッマルの上には「プンチェ」が設置されて、風や雨が強い時、日光が当たる時には「プンチェ」をおろして、強風、雨、日光を防ぐ。

② 「小クドゥル」がある3間型: 「ジョンジ」部分の一部の部屋が2つになる型をいう。これは、家族の間に独立生を追求し、経済的能力が可能な限り、1つの部屋を増やすことができる平面形態である。

a. 1間型: 「小クドゥル」がない場合、「ジョンジ」の空間の2分の1を「小クドゥル」に使用し、「ジョンジ」の前か後に変化して配置が出来る。暖房の方法として、「大クドゥル」は左側に入出口を利用し、焚き口を使って動線が長くなる。また、「小クドゥル」は「ジョンジ」のかまどを直接使うから動線が短くなる。1間型はだいたい「オルレ」が短いし、「ウヨン」は存在しないのが多い。普通、貧しい生活の民家で都市型村落に多く、北部の方に密集されている。

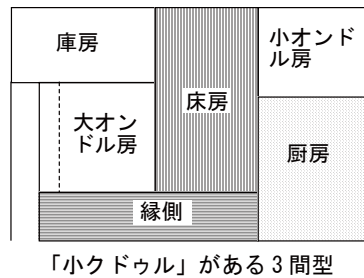
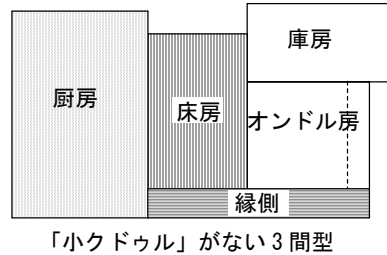


図10 3間型間取り

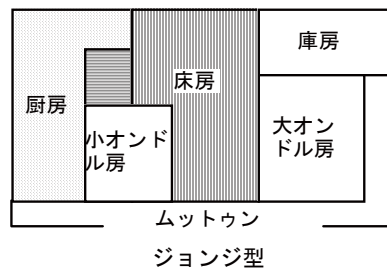
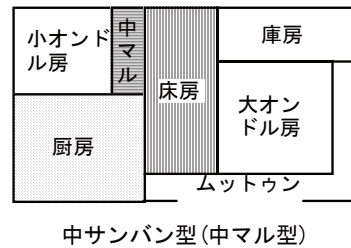


図11 「小クドゥル」がある3間型間取り

- b. 中マル (床)型：1 間型の「ジョンジ」空間に「小クドゥル」の一部が縦分割りし、「サンバン」と「小クドゥル」の間に小さい床房を構成する。これを中マル型といい、「ジョンジ」の位置は左、右どちらでも配置できる。「中マル」は「ジョンジ」の一部になって「ジョンジ」空間が広くなるし、厨房内部の機能を分化する。こういうことは「チェッパン」がある 4 間型に変化する過程だと思われる。
- c. ジョンジ内型：「ジョンジ」空間の内部に「小オンドル」を配置して、「中マル型」とは違い、「小クドゥル」を「サンバン」から直接出入りできるようにした形態である。外壁との間の空間は台所の一部になって、暖房空間や収納空間として利用される。平面形態や「小クドゥル」の暖房機能が 4 間型と類似している点は 4 間型への発展の段階だと考えられる。

### 3. 4 間型

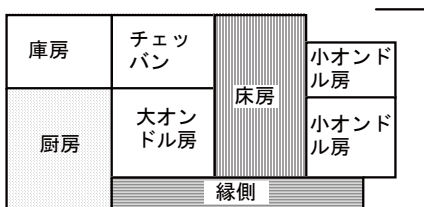
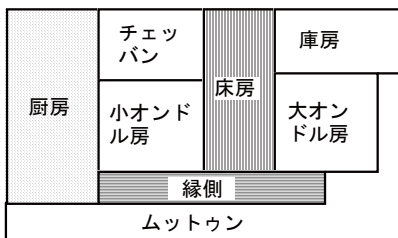


図12 4 間型間取り

4 間型の間取りの構成要素はジョンジ、チェッパン、大小オンドル房、サンバン、庫房などである。4 間型で住むと物事がすべてうまくいかなくなるので、4 間型の建築は避けると云われている。しかし、4 間型は主屋の内部が拡張されるのに伴い、便利な点もあるので、それなりに存在する理由がある。「チェッパン」は典型的な食事空間として「小オンドル」がない 3 間型のジョンジ-マルとは違い、ジョンジ-チェッパン-マルに連結されていて、現代生活の基本空間である。寝食分離が可能であり、空間別機能分化がよく出来ている。ジョンジが主屋から分離した型よりは、主屋についているほうが便利であるため、4 間型の間取りが考察されたものと思われる。しかし、一般的に濟州島の民家は長方形を長く作るよりは、長さを迎えて別棟に分散配置する傾向がある。これは強風と火災を意識した方式である。例 3 では 4 間型の間取り要素をすべて備えている。ただし、濟州島の典型的な

間取りとは相違いをみせている。ここでは、本土の影響を強く受けていることと、生活の便利に対して部屋の配置を決めていることがわかる。大オンドル房がジョンジに接しており、ジョンジから炊事の熱がオンドル房の下に通じるようになっているのは、本土の影響と思われる。又、大オンドル房、庫房とジョンジが通じているのは、生活上の便利さを求めたものである。

## 7 伝統民家の立面

### 7-1 概要

伝統住居である茅葺の民家の屋根は勾配が3/10であり、流線形の台形の屋根になっている。これらを支えている多孔質の玄武岩の壁で建てられているのが濟州島の民家のファサードである。一般的に民家の美的構成原理は、統一性であるといえる。これは建築の規模、ハンラ山を中心とした民家の向き、稜線の曲線と茅葺きの屋根の曲線、主屋の壁である玄武岩と塀の石垣の自然的な線と厚ぼったい質感などに調和しながら統一性を構成している。

すなわち、濟州島の自然風景と伝統民家の著しい美的構成原理は、調和を基にしたうえで統一性を持つということである。もう一つは、無装飾の効果を強調することである。これは、装飾が目立つと形態の

美が弱くなるからである。濟州島伝統民家の装飾は建具の「格子模様」と「亜子模様」が全部で、ほとんど単純な「格子模様」が多い。このような無装飾効果は、素材の本質を追求してから形態の純粹性を表す効果的な方法である。



写真14 背山臨水の濟州島の伝統民家

## 7-2 屋根

濟州島において一般的に最も多く見られる屋根は、茅葺きであった。たいてい、耕地の一部に屋根の茅材を得るための茅場を設けて置き、茅を自給している場合が多い。しかし、茅場がない場合は茅を購入するか、ハンラ山の斜面や畑の周辺に自生する茅を刈って用いた。本土の陸地では、稲藁葺きの苫を編んで葺くのではなく、茅をしきひろげ、それが風に飛ばされないように茅縄を網状に掛け、括り付けている。縄の太さは濟州島の東西で異なっており、東部では直径3cm内外であるのに対して、西部では直径4cm程度のもを用い、東部よりも重たげな印象を与えている。1970年代には屋根の材料として用いられたものはスレートである。これは屋根改良事業の一環として全島の普及していた。スレートの長所としては、葺き替える必要がないことや屋根から雨水を受けて利用するのに都合がよいこと、茅葺きよりも堅固であること、などがあげられる。一方、短所としては、茅葺きの場合に比べて一度に多くの費用がかかる。また、茅よりも直射日光に対する断熱効果が劣り、夏季に屋内が暑くなり、冬季にはやや冷え込むことから温熱環境には劣悪である。トタン屋根は濟州島全体の自然景観に調和せず、異質な感じを与える。この時代にはトタンの屋根もあるが、きわめて少ない。長短所はスレートと同様であるが、スレートよりは長持ちする。それ以後、濟州島の人々は少しずつ豊かになって、瓦葺きの民家が多くなってきた。瓦葺きの民家の屋根は風に飛ばされたり、瓦のすきまに雨が入り込んだりしないように、瓦と瓦を石灰でしっかりと接着させているため、本土の瓦葺き屋根に比べて白い色が目につく。最近では濟州市と西帰浦の住宅地にRC造の建物が数多く建てられている。これもやはり強風地域の屋根の形態としては理想的なものであるが、濟州島の風土的な民家とはいいいにくい。このような風景は沖縄と非常に似ている。やはり、濟州島



写真15 濟州島伝統民家のかやぶき屋根

の風土的な民家は茅葺きであると言えよう。茅葺き屋根の屋根型は、韓国本土でみられる寄棟型の小屋組に茅を厚くかぶせているため、隅棟の線がみえず、長く丸みをおびた半卵型の低いドーム状になっている。屋根の勾配を緩くし、隅棟の角を際立たないように丸くしたのは強風に対する抵抗を最小限にするための耐風の形態である。このような屋根型は主屋をはじめ、



副屋、脇屋、畜舎、門屋など、あらゆる建物の茅葺き屋根でみられる。

### 7-3 壁

壁は木造構造体を雨、台風、から保護する為、玄武岩で築いた非耐力壁である。壁で使われた石の厚さは約35~50cm程度で地面から上部までの高さは1.9~2.0mである。上部は9~10cmほど積み替えて確実な勾配を与えて建物の安定感を高める要素になる。石壁をひさしまで積まないようにして約30cmの空間を置き、影を作っている。これは屋根が軽快に浮上に見える役割や石壁はもっと強く堪えるように感じられる。



写真16 玄武岩で積んだ壁の立面

### 7-4 材料

濟州島の伝統住居の建築材料は韓国本土の基本素材である木材、石材と同一であるが、材質から見ると相違がある。本土では木材として松が一般的に使われている反面、濟州島では闊葉樹である白欐、栗の木、桜などが使われている。石材の場合、本土では花崗岩であるに対し、濟州島では玄武岩で質感と色調に大きな違いが見える。玄武岩は多孔質で、輝度が低く、磨耗性が大きい。

このように木材と玄武岩の質感対比は全体民家の外形へ一貫し、形態的に素朴感と節制された表現性を示す。

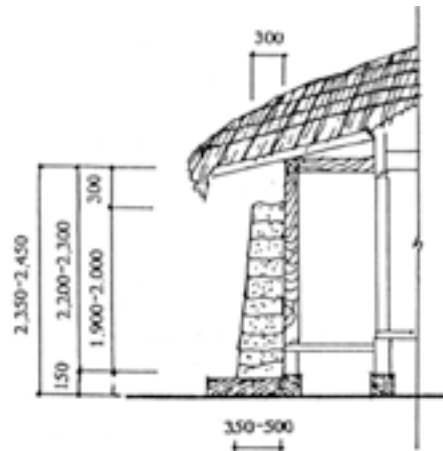


図13 壁の断面

## 8 まとめ

以上の結果から濟州島における集落および伝統民家の居住空間構成を明らかにした。その結論として以下のようにまとめた。とくに、居住空間に対しては自然人文環境が民家に与えた関連性を明確にした。

### 8-1 城邑集落の空間構成の特徴

城邑集落は四神相応と背山臨水という風水思想の基本でつくられていたと思われる。風水の二つの形局を使うことによってその時代の社会的、自然的環境に対する心理的な安心感を与えたと考えられる。又、城郭内の集落の空間構成は人間を素材として扱い、風水の小宇宙的思想を持つ形而上学的思考が強かったと思われる。

集落は二つの中心軸により二つの中心点が出る。一つは機能的な構成のための点であり、もう一つは幾何学的な構成比を持つ点である。中心点と城門、城郭に対する比は $1 : \sqrt{2}$ と $1 : 1.618$ になる。その比例は過去の東アジア地域によく使われた黄金比になり、 $1 : 1.618$ はフィボナッチ数列の黄金比になる。このような比は今までの調査した韓国の樂安邑城、台湾の恒春県城にも見られるものである。

### 8-2 自然人文環境が伝統民家に与えた影響

#### 1. 自然環境の影響

濟州島の気候の特徴である風はもっとも住居形態に重要な影響要素である。この風の影響に対してはマダン（庭）を中心に棟を別棟で求心的配置にしている。また、高い石垣の塀、非耐力壁の石積み、流線型の屋根、外窓を保護する為の板の窓（トムン）、深い軒のムットウンの空間、ムットウンに設置するプンチェの開閉装置などは強風からの適応の為に作られたものである。ここで、もっとも重要な要素である屋根は、屋根が飛ばさないように茅で作られた網のようなもので括る。網のピッチは25~30cm ぐらいである。屋根の形態は本土では「L」の型があるに対し、濟州島ではまったく見られない。その理由として雨と風に不利だからである。屋根の材料が瓦の場合は石灰で接着し、雨の漏水や風に瓦が飛ぶのを防ぐ。また、屋根の傾斜は緩慢し、棟の角を丸めにしたのは強風に対して抵抗を最小限にする為である。

住居の配置は気候の影響の以外に方位に対して、吉凶慣習の決定的な要因となる地理の影響が大きい。濟州島のように島の中央に高いハンラ山がある地形的条件からは「背山臨水」という韓国では、山を背負って水（海、川）を眺めるということは良い条件である。だが、濟州島の

北の住居は島の真ん中に大きなハンラ山があるから自然に北向になる。この北向きの住居は風水説と慣習上、凶向であり冬には北西風の風害があるから、濟州島の北の地域の民家は東向き、西向きが普遍的である。民家の茅葺きの屋根の線は緩慢な傾斜で濟州島の中央にあるハンラ山の穏やかな線によく似合って、自然との調和を強調している。濟州島は火山島であったため、多孔質の玄武岩が広く分布しているので民家の材料としてよく使われている。民家の構法として側壁は玄武岩の石積み、中の骨組みは木で建てられている。つまり、架構式と組積式の混合形である「木骨石」の住居になっている。それ以外に玄武岩が使われているのは、塀の石垣、水運びの壺を置く台であるムルパン（水板）、トンシ（便所）、墓、ハルバンなどその範囲は広い。

濟州島の民家は風水地理思想の影響で一般的に山を背負って、南方向に配置して、中国大陸からの強い北西風を緩慢な傾斜面や樹木によって一次的に緩和し石垣の塀によって二次的に減少する。それで南の風を家へ入れ込み、快適感を感じるようにしている。太陽の熱が照る時、マダン（庭）はその露出によって発生する地熱から空気の温度が上昇し、熱い気流が発生する。しかし、「アンティ」の陰空間は日陰になって周りより低い温度を保ちながら気流の循環現象で、マダンの方向へ移動する。こ

れは「マル」(サンバン)の後門の細い通路の流速は速くなって、風がない蒸し暑い夏でも「マル」に座っていれば風がふいてきて涼しいと感じられる。このように濟州島の通風計画は環境工学的に有効である。

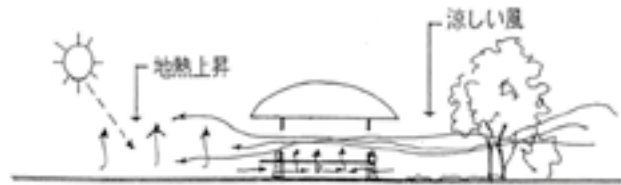


図14 伝統民家の気流循環図

## 2. 人文・社会的環境が伝統民家に与えた影響

濟州島の伝統文化を支配する構成要素として巫俗信仰、儒教思想など独特な家族制度がある。その中で特に民間巫俗信仰は住居形態及び空間構成に数多く影響を与えてきた。巫俗信仰は濟州島の人々の生活とイデオロギーを最も大きく支配してきた内在的価値の世界ともいえる。宗教的な側面から見ると巫俗信仰は道徳と倫理の体系を持っていなかったが、神との交感の直線的な観念、神格の位階、入口、内外を神聖することは、断片的なことだが、住居空間で場所意識への影響が与えられたことを表している。

濟州島の伝統住居における垂直軸の中心であるサンバン（床房）は「ソンジュ」と言い、家の全体を見守る神であって住居の中心であり、聖の中心でもある。これに対して外から内までの

アプローチである水平通路は-オルレ-チョンナン-マダン-サンバン-という水平軸によって配置されている。住居の内部は聖域で絶対的な実際の領域であって、水平通路はその中心に至る陰難な道を象徴し、また、俗から聖への向きを意味すると済州島の人々は思っていたのである。

伝統民家の平面的概念は風水の陰陽思想を取り入れ、四方を陰陽に分割している。そのうえに、部屋の場所によって固有の信仰が混在している。サンバンは風水の穴であり、住居空間の軸になっている。

住居の配置を決定する時は、主山と案山の軸及び倚斗亭と朝山の軸を重視して家屋の向きが決められたと思われる。その後、マダンを中心に母屋の位置と大門の関係を風水の符号を加えることによって心理的に吉、凶を与えられたと考えられる。

城邑集落における住居の志向は、日射、日照、通風に有利な方向になっており、住居の軒の出の長さや床から軒の出までの高さが適当になっている。以上のような城邑集落の集住空間構成は風水思想に基づいたことで、自然環境を合理的に利用したと考えられる。すなわち、風水の基本は厳しい自然環境に対して自然の条件を最大に利用しながら、人々の繁栄を願い安全、快適な生活環境をつくり出すことを目的としたものであり、集落、住居の合理的な空間構成の演出方法であると思われる。

#### 注

- 1) 風水では人間が住む所を陽宅、死者が住むところを陰宅といい、両者において気が最も集まる中心的な所を穴、穴の前面で生氣を受けられる平らな場所を明堂という。
- 2) 「葬書」: 晋時代の郭璞 (A. D 276~324年) によって書かれた最古の風水書籍。
- 3) 人と自然環境の中で、人間にとって最も大切なのは空気と水である。「藏風得水」というのは良い風を蓄えて、良い水を得る方法であり、生活をより安全な状態に保つ意味である。
- 4) 穴や明堂は陰を背にし、陽を抱えて、後に山を背負い、前面に水を持つのが基本である。このような場所を背山面水、背山前水又は「背山臨水」と言い、吉地である。
- 5) 川尾川は地表面が透水性の強い玄武岩で形成されているので川の水は地下水になっている。
- 6) 集落の背後の山を主山とし、その主山から集落の前面に水があるところの方向の軸とする。すなわち、主山と案山を結ぶ軸であり、ある程度の幅がある。気がもっとも流れる軸であり、穴と明堂が存在することによって集落、住居が位置する。
- 7) 村山智順著、催古城訳、「朝鮮の風水」p.119~120、民音社、1990、「天心十道証穴」の理論による。
- 8) 風水の完璧な地形を求めることが困難な場合、それぞれの地形、風土に適した風水要素をつくること出来る。例えば台湾の場合は住居の前面に池（風水池）を掘り、入口の両側に二本の木を植え（風水樹木）、背後の植林（風水林）など風水要素をつくっている。
- 9) ソンミンギ、「韓国の古造形意味」、技文堂、1990、p.31~33
- 10) ソンミンギ、「韓国の古造形意味」、技文堂、1990、p.57
- 11) 朴賛弼、山田水城、古川修文、風水思想から見た韓国・台湾の集住構成に関する研究、民俗建築学会誌第108号、1995年11月、p.8

- 12) 集落における住居の母屋の向きが一番多い方位。
- 13) 金光彦、「風水地理」、テウン社、1993、p.24  
 村山智順の「朝鮮の風水1931」には形局が約175種類載っているが、最近、金光彦の「風水地理1993」では韓国だけで266種類の形局が紹介されている。
- 14) 城邑民俗集落総合整備計画、南濟州島、1994、p.26
- 15) 金鴻植、韓国の民家第2巻1992年 p.712
- 16) 村山智順、催吉城訳、朝鮮の風水、民音社、1990、p235～p236、風水の条件が不足であれば風水要素をつくることを裨補といい風水に合う形態にした。
- 17) ヘテ：善悪の判断が出来る伝説の理想の動物、韓国国語辞典 東亜出版社、1990

#### 参考文献

- 朴賛弼「韓国濟州島における城邑集落の空間構成について 風水思想からみた集住空間に関する研究その1」日本建築学会計画系論文集、第497号、1997年、p89～94
- 金奉烈『韓国の建築』空間社、1988
- 金光鉉『韓国の住宅』丸善、1991
- 香山嘉夫監修、野村考文訳、朱南哲『韓国の伝統的住宅』九州大学、1981
- 金虎年『韓国の明堂』、ドンハク社、1989
- 申榮勲『韓国伝統民家の原形研究「韓国のサリム家」』悦話堂、1983
- 申榮勲『韓国の造形』テウン社、1989
- 延世大学校産業技術研究所『濟州建築』濟州島建築社会、1992
- 張保雄『韓国の民家』古今書院、1989
- 野村考文『朝鮮の民家』学芸出版社1981
- ハウジングスタディグループ『韓国現代住民学——マダンとオンドルの住様式』、建築知識、